

英語の使役構文の成立条件とその獲得について

Cognitive Constraints on Causative Constructions in English and Their Acquisition

本多 明子[†]

Akiko Honda

[†]神戸女子大学

Kobe Women's University

a-honda@yg.kobe-wu.ac.jp

概要

This study focuses on the acquisition of the English causative constructions from the viewpoint of Construction Grammar. The theory regards grammar such as words and idioms as constructions – pairings of form and meaning. This paper deals with the adjectival resultative construction (RC) and the *make*-causative construction (MCC). Previous studies have shown that the form-meaning of a construction is based on the argument structure and the meaning of general-purpose verbs such as *do*, *go*, *make*, *give*, and *put* (cf. Clark (1978)), which are frequently used in children's utterances in the early stages of language acquisition. According to the previous research, the RC is related to the verb *make*, which expresses the meaning of causative. Although this may account for the reason why the RC has a causative meaning, questions remain regarding the differences in constructional properties. We present a new proposal by comparing the constraints on these two constructions. This paper shows that the RC and the MCC are separate and independent. The cognitive constraint on the RC is different from that of the MCC, and also there is a difference in acquisition.

キーワード：使役構文, 構文文法, 獲得, 成立条件

1. 構文の形式と意味

言語学における構文文法理論は、構文という基本的な概念を文法における基本単位とし、構文は各々独自の形式と意味から成り、言語は構文の集合であるとの考えに基づいている(Fillmore, Kay & O'Connor (1988), Goldberg (1995)). 例えば、英語には、結果構文(Resultative Construction (以後, RC))と呼ばれる構文が存在し、RCの form (形式)と meaning (意味)は、次のとおりである(cf. Goldberg (2004), (2006)). Subj は Subject (主語), V は Verb (動詞), Obj は Object (目的語), RP は Resultative Phrase (結果句)を表す。

(1) Resultative Construction (RC)

Form: [Subj_X-V-Obj_Y-RP_Z]

Meaning: X CAUSE Y TO BECOME Z

それぞれの構文の形式と意味がどのように結び付いているのかについて、Goldberg は言語獲得初期に子どもの発話のなかで頻繁に使用される *do*, *go*, *make*, *give*, *put* など(cf. Clark (1978))汎用性の高い動詞(general purpose verbs)の項構造と意味を基盤にしていると論じている。例えば、動詞 *make* は[Subj_X-V-Obj_Y-RP_Z]の形式に生じる頻度が高いことから、この形式をもつ RC は動詞 *make* (使役)の意味と結び付いている。他にも、英語の使役移動構文(Cause-Motion Construction (CMC))は動詞 *put* と、二重目的語構文(Ditransitive Construction (DC))は *give* の項構造と意味に基づいている。つまり、汎用性の高い動詞が特定の項構造に頻出することで、子どもは構文の形式と意味の対応関係を認識しているということである。

- (2) a. RC [Subj_X-V-Obj_Y-RP_Z] *make*
 b. CMC [Subj_X-V-Obj_Y-Obl_Z] *put*
 c. DC [Subj_X-V-Obj_{1Y}-Obj_{2Z}] *give*

果たしてそうなのか。本研究では、この点について、構文特性をもとに検証する。

本論文の構成は次のとおりである。第2節では構文論的視点から、RCと動詞 *make* を伴う使役表現の成立条件について提示し、その成立条件を基に、前者と後者は別個に独立して存在する構文、すなわち、後者は Make-Causative Construction (MCC)であることを示す。第3節では、当該構文間の関係性を示すことにより、RCとMCCの獲得上の差異を説明できることを述べる。本研究における子どもと養育者の発話に関しては、発話データベース CHILDES を利用している。第4節は纏めである。

2. RC と MCC の成立条件

Goldberg が提案するように、仮に動詞 *make* の項構造と意味が RC に対応しているのであれば、*make* を用いた表現により記号化できる使役事象を RC で表すことができることになる。しかし実際には、そうならない。
*マークは文法構文として適格でないことを示す。

- (3) a. He made it dry/damp by wiping it.
b. He wiped it dry/*damp. (Green (1972: 83-84))
- (4) a. He made it flat/safe by hammering it.
b. He hammered it flat/*safe. (ibid.)

例えば(3a)と(3b)を比較すると、動詞 *make* を用いた(3a)の場合には、形容詞 *dry* だけでなく、その反意語である *damp* も共に生じることができる。それに対して、RC の場合には、(3b)に見るように、RP に *damp* が生じると RC として不適格になる。日常的には、例えば、洗った食器を拭いているうちに、布巾が水分を含み吸水性が下がり、拭かれた対象が湿った状態になることがある。しかし、このような因果関係の事態を RC では言語化できない。

他にも、(5a)と(5b)、(6a)と(6b)のような対比が見られる。動詞 *make* を用いれば表現できる事態であっても、RC では、文法構文として成立しない場合がある。(5b)と(6b)の例は Simpson (1983: 146)からの引用である。

- (5) a. Medusa made the hero stone by seeing it.
b. *Medusa saw the hero stone.
- (6) a. Midas made the tree gold by touching it.
b. *Midas touched the tree gold.

(5)に見るように、Medusa が英雄を見て石の状態に変えたという因果関係の事態について動詞 *make* を用いた表現では言語化できるが、RC ではできない。同様のことが(6)にも当てはまる。

そもそも RC には、RC 特有の構文を成立させている条件がある(拙論 (2004))。つまり、RC では動詞で表される行為が結果事象を引き起こす直接的な原因となっていなければならないのである。上述の(5a)と(6a)が文法構文として成り立つのは、使役動詞 *make* を用いた構文特性による。即ち、視覚にとらえたものを石の状態に変えたり、触れたものを黄金の状態に変えたりするのは、其々の動詞(*see* (5), *touch* (6))によって表される行為

ではなく、Medusa や Midas の能力であり、その原因は主語にある。また、先に挙げた(3b)の*He wiped it damp. が RC の文法構文として成立しないことについても、同様の説明が当てはまる。すなわち、代名詞の *it* で表されているものが濡れた状態になった直接の原因は、*wipe* (拭く)という行為自体ではなく、水分を含んだ状態の布巾で拭いたなど、その行為以外のところにある。

このように RC と MCC は文法構文として成立する条件が異なっている。本論文では、動詞 *make* を用いた使役表現を RC とは独立して存在する Make-Causative Construction (MCC)とみなす。

- (7) Make-Causative Construction (MCC)
Form: [Subj_X- MAKE-Obj_Y-RP_Z]
Meaning: X CAUSE Y TO BECOME Z

加えて、RC の構文特性を考慮に入れ、その意味を(8)とする。

- (8) Resultative Construction (RC)
Form: [Subj_X-V-Obj_Y-RP_Z]
Meaning: ACTION CAUSE Y TO BECOME Z

3. RC と MCC の獲得

構文の成立条件が異なる RC と MCC を独立した別個の構文であると捉えることにより、この二つの構文の獲得上の差異について説明することができる。すでに拙論 (2019)で示したように、MCC は一般に2歳の段階で獲得されている一方で(*shall I make it bigger for you?* (Lara (2歳7ヶ月))、MCC と同じように、RP の位置に形容詞が生じる RC は2歳の段階では獲得されていない。本研究においても、さらに調査対象を増やし、子どもの発話データベース CHILDES より Thomas (2歳0ヶ月 (以下、データの発話時期は2;0のように表記する) ~4歳11ヶ月)と MacWhinney (2歳3ヶ月~7歳8ヶ月)の調査を行ったが結果は同じであった。(9)と(10)に見るように、Thomas と MacWhinney も3歳に至るまでに MCC を獲得していた。

[Thomas]

- (9) a. where the doctors are going to make her better. (2;4)
b. <make it> [/] make it harder. (2;7)

- c. Dimitra make it clean. (2; 10)
 d. make it better. (2; 10)
 e. make her better. (2;11)
 f. dustbin man crush them make some bigger. (2; 11)
 g. make it nice an(d) dark there. (2; 11)
 h. fire make it nice an(d) clean. (2; 11)

[MacWhinney]

- (10) a. I'm going to make you happy. (2; 06)
 b. you make it better. (2; 06)
 c. make it dry. (2; 06)
 d. it make me sick. (2; 06)
 e. I'm going to make it big at home. (2; 09)
 f. because they make me mad. (2; 10)

上記の子どもの発話事例からも分かるように、MCCのRPの位置には、RCに比べると better, harder, clean, happy, big など様々な状態を表す形容詞が生起することができる。

一方、RCの獲得については、養育者が(11)に見るRCを用いて子どもに向けて発話している場面があったが、子どもの発話にはRCは観察されなかった。

- (11) a. I've got to cut the parcel open, haven't I?
 (Thomas (2; 01)に向けて)
 b. let's brush these teeth clean.
 (Thomas (2; 04)に向けて)
 c. Pingu wiped the baby's bottom clean and then gave the dirty cloth to Pingu.
 (Lara (2; 09)に向けて)

このように、一般に2歳児はMCCをすでに獲得していることに加え、養育者からのRCの入力があるにもかかわらず、RCの発話が観察されない。この点についても、MCCを独立した構文としてRCとは異なる特性を持つ別個の構文であると捉えることにより説明できる。上述したように、RCが文法構文として成り立つには、RCが表す結果事象の原因が動詞によって言語化される行為に帰されることが条件となる。一方で、MCCの場合には、言語化される結果事象の原因を主語など動詞の行為以外に帰することができる。この違いがRCとMCCの言語獲得上の差異を生み出している要因の一つであると考えられる。

MCCからRCの獲得に至るまでには、さらに幾つか

の構文を獲得していることが確認できる。CHILDESに基づく調査結果からも、MCC獲得後、子どもは(12)のような結果事象と原因事象を単文に分けて接続詞 and で結んだ形式や(13)のような原因事象について because 節の形式を用いて発話している。原因事象と結果事象が一つの形式で記号化されるRCの獲得までには幾つかの構文獲得段階があることが確かめられる。

- (12) I'm going to kill him (.) and he's going to be dead
 (MacWhinney, 3; 05)
 (13) a. I wanna go to bed now (be)cause I'm tired.
 (Lara, 2; 11)
 b. run inside (be)cause (.) &-um [ʔ] &-um (.)
 (be)cause the doors are shutting. (Thomas, 3; 08)

4. おわりに

本論文では、英語の使役構文に属する形容詞を伴うRCに着目し、構文文法論的観点からその形式が持つ意味について言語獲得の側面を考慮に入れ考察を行ってきた。RCと使役動詞 make を伴う、いわゆるMCCは成立条件が異なることから、独立して存在する構文であるとみなされる。RCとMCCは基本的に因果関係を記号化しており、使役の意味を表す点では両者は一致するものの、RPによって表される結果の原因となる部分の違いにより、言語化できる構文が異なってくる。RCを獲得する上で、その特性上、MCCとは異なり、結果事象の直接的な原因が動詞によって表される行為にあることを認識しておく必要がある。今後は、発話データをを用いた体系的、且つ、量的な分析を行うとともに、子どもの出来事の表象や因果関係の認知の発達と言語使用の関連について、さらに研究を進めていく。

謝辞

本論文の執筆にあたりまして、査読委員の先生方に大変貴重な御意見を賜りました。心より感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費 18K00668 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] Clark, Eve V., (1978) "Discovering what words can do", the Papers from the Parasession on the Lexicon, Chicago Linguistic Society, pp. 34-57.

- [2] Goldberg, Adele E., (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago, University of Chicago Press.
- [3] Goldberg, Adele E., Devin Casedhiser and Nita Sethuraman, (2004) “Learning Argument Structure Generalization”, *Cognitive Linguistics* 14, pp. 289-316.
- [4] Goldberg, Adele E., (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford, Oxford University Press.
- [5] Georgina M. (1972) “Some observations on the syntax and semantics of instrumental verbs”, In Paul M. Peranteau, Judith N. Levi & Gloria C. Phares (eds.), *Papers from the eighth regional meeting of Chicago Linguistic Society*. 83-97.
- [6] Honda Akiko, (2019) 形容詞を伴う結果構文と Make 使役構文の獲得について (On the Acquisition of Adjectival Resultative Constructions and Make-Causative Constructions in English) 日本認知科学会第36回大会論文集. (OS10-7).
- [7] MacWhinney, B., (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. 3rd. ed. Vol. 2. *The Database*, Mahwah, N.J.: LEA.
- [8] Simpson, Jane (1983) “Resultatives”, in L. Levin, M. Rappaport, and A. Zaenen, eds., *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp. 143-157, Bloomington, Indiana University Linguistics Club.